

ジフテリア (diphtheria)



定期接種
DPT-IPV

ジフテリア菌による感染症で、**潜伏期間は通常2～7日**ですが、長期の場合もあります。**飛沫感染**により感染します。日本国内での発病はほとんどありません。

発熱，のどの痛みや飲み込むときの痛み，頭痛，だるさなどの症状で始まります。その後，鼻づまり，鼻出血，声がれなどの症状が出るようになり，呼吸困難，心不全，呼吸筋まひなどに至ります。

園や家庭での対応

予防が最も大切であり，**四種混合ワクチン（DPT-IPV）**を，初回接種3回（生後3～12か月の間に3回接種）＋追加接種1回（1年～1年半後に1回追加接種）の合計4回接種します。なお，2012（平成24）年11月の四種混合ワクチン導入の前に，既に三種混合ワクチン（DPT）の接種を開始している場合は，三種混合ワクチン（DPT）の定期予防接種を継続します（その場合は，単独の不活化ポリオワクチンも，接種することになります）。

（2）第二種感染症

表5-3 第二種感染症

- インフルエンザ（特定鳥インフルエンザを除く） ●百日咳 ●麻疹
- 流行性耳下腺炎（おたふくかぜ） ●風しん ●水痘（水ぼうそう）
- 咽頭結膜熱（プール熱） ●結核 ●髄膜炎菌性髄膜炎

第二種感染症は感染力が強く，それぞれの感染症ごとに**出席停止期間**が定められています（詳細はp.134 表5-5に示してあります）。ただし，**病状により学校医その他の医師において感染のおそれがないと認めたときは，この限りではない**とされています。

インフルエンザ（特定鳥インフルエンザを除く） (Influenza : the Flu)



発熱



咳



鼻水



任意接種
インフルエンザ

インフルエンザウイルスによる感染症で，**潜伏期間は1～4日**です。基本的には**飛沫感染**ですが**接触感染**によっても感染します。感染期間は発熱1日前から3日目まで

ークとし、7日目頃までですが、低年齢の子どもでは長引く傾向があります。

^{おかん}悪寒や頭痛、高熱（39～40℃）で発病します。そのほか筋肉痛や腰痛、咳、鼻水、鼻づまりがみられ、嘔吐、下痢、腹痛がみられることもあります。脳症を併発するとけいれんや意識障害をおこして死に至ることもあり、救命できても後遺症を残すことがあるので注意を要します。その他の合併症としては、肺炎、中耳炎などがあげられます。

出席停止期間は、発症後5日を経過し、かつ解熱後2日間（幼児にあっては、3日）を経過するまでです。これは、抗インフルエンザ薬（リレンザ[®]、イナビル[®]、タミフル[®]など）等を服用することで解熱は早まりますが、ウイルスの排泄は続くため、解熱しても感染力が残っている子どもが登園・登校してしまうケースが増えているためです。発症して5日を過ぎると、ウイルスはほとんど検出されなくなるという研究報告をもとに、発症後5日を経過という条件がついています。

園や家庭での対応

手洗いやうがいをしっかりし、マスクを着用します。園では加湿器等を用いて室内の湿度を高め、保ちます。またインフルエンザが流行する前に予防接種（任意接種）を受けよう勧めます。生後6か月から接種可能で、13歳未満は2回接種するとよいとされています。インフルエンザの予防接種は、接種することで、発症率の低下や重症化率の低下が期待できるといわれています。

ひやくにちぜき
百日咳

(Whooping cough : pertussis)



咳



定期接種
DPT-IPV

百日咳菌による感染症で、潜伏期間は7～10日です。飛沫感染、接触感染により感染します。感染期間は、咳が出始めてから4週目頃までで、抗菌薬を飲み始めると7日程度で感染力は弱くなります。

連続したコンコンコンという短い咳の後、ヒューと笛を吹くような音を立てながら息を吸うレプリーゼという咳をするのが特徴です。この特有の咳が2～3週間から数か月にわたって続くこともあります。乳児期早期では典型的な症状が現れず、無呼吸発作からチアノーゼ、けいれん、呼吸停止になることがあるので注意を要します。

出席停止期間は特有の咳が消失するまで、または5日間の適正な抗菌性物質製剤による治療が終了するまでです。